



特集

ジェンダーの視点で考える、 みんなを守るための防災

VOL.
70

令和3年(2021年)
8月発行

- P6 港区の防災の取り組みについて聞いてみました!
- P7 リーブラで活動する団体紹介
- P8 おすすめ図書





ジェンダーの視点で考える、 みんなを守るための防災

防災対策で求められる男女双方の視点

地震や大雨、津波などの自然災害が多い日本。私たちは常日頃から災害に関する正しい情報を知り、対策をとる必要があります。2011年3月に発生した東日本大震災では、避難所において下着や生理用品などの衛生面の問題、プライバシーを守るパブリックスペースの確保、性暴力への対策などが課題となっていました。東日本大震災発生から10年が過ぎた現在、改めて防災について考えてみましょう。

1. 男女双方の視点から見た 災害時の困難

災害は、だれにでも平等に襲いかかるわけではありません。年齢、障害があるかないか、そして性別によってもその困難は大きく異なります。

大規模地震では、建物の被害だけでなく、ライフラインや物流の機能が低下すると、トイレが使えない、食料の確保が難しい、洗濯・入浴が困難といった問題が起こる可能性があります。保育園・学校・デイサービス・訪問介護などが一斉にお休みになることもあるでしょう。そうした状況で家族の世話をすることは大変な重労働となってしまいます。

避難所へ行くことになった場合、集団生活の中で、プライバシーが守りにくい、育児・介護用品、女性用の衛生用品や下着などの必需品が十分に手に入らない、安全面で不安を感じるなど、女性はより厳しい状況に置かれがちです。実際、東日本大震災における避難所では、うつ傾向は女性のほうが強かったとの調査報告もあります。

ところが、避難所の運営責任者は男性の職員や地域リーダーが中心で、女性は炊き出しといった形の、固定的性別役割で進められる傾向にありました。結果として、女性の困りごとの声が表面化されない、衛生・栄養・育児・介護などの視点による環境改善や支援要請が行われにくくなっていったのです。

一方で、男性は過労や自殺、復興期の引きこもりや孤独

死といった困難に直面する傾向もあきらかになっています。

そのため、男女双方の視点で防災対策を行っていくことが大切です。地域では、男女双方がリーダーとなって防災啓発や避難所運営が行われるようになると、いざというときの助け合い活動をより効果的に行うことができます。防犯面については、女性と子どもだけに気を付けるように働きかけるのではなく、その場にいるみんなで声をかけあって、協力して防犯体制を作っていくことが大切です。警察の巡回なども行われてきました。気になることがあったら警察・行政・保健所・男女平等参画センターなどに相談しましょう。

2. 大規模地震に備えて

もしも都心を大きな地震が襲ったときに、仕事などで自宅を離れていると、公共交通機関が動かなくなるなど、帰宅困難者になる可能性があります。すぐに移動を始めると危険な場合もあるので、安全性が確認できてから移動するようにしましょう。保育園や学校に子どもを迎えに行けない場合もありますので、先生方に災害時の対応方針を聞いておくようにしてください。

いずれにしても、どこで災害に遭うかわかりませんので、災害時に役立つものをいくつか絞って、最低限身につけておくようにすると安心です。また、職場にも歩きやすい靴やお菓子、水、ヘルメットなどを置いておくようにしましょう。



家庭の備蓄は最低3日間といわれますが、人口の多い都心の場合、食料供給に時間がかかる可能性もありますので、普段使いのレトルト食品や缶詰、乾物などを多めにストックしておくかたちで、1週間程度まかなえるようにしておくことにより安心です。

帰宅困難者になってしまった場合のリスク

予想される事態

- 電車が止まっている
- 橋が壊れる・わたるのが危険
- 路上の危険性(倒壊建物、落下物)
- 幹線道路の渋滞による救援の遅れなど
- 大規模火災発生

無理して帰宅すると非常に危険!都心部は車で迎えに行くのは不可能!

東京都帰宅困難者対策条例

- むやみに移動を開始しない!(一斉帰宅抑制)
- 家族との連絡手段の確保などの事前準備

予想される困難

原則3日間帰宅できない/その後、徒歩帰宅の必要があるかも

- 家族や職場と連絡が取れない!
- 靴や体力の問題で歩けるか子どもを迎えに行けない! 不安!
- 食料・水、トイレが無い!使えない!
- 防犯の必要性を感じる!

情報提供/減災と男女共同参画研修推進センター

特に女性に 女性の災害への備え 知っておいてほしいこと ものの備えを確認しよう

いつ災害にあうか分かりません。生理用品など女性が必要なものは、普段からなるべく持ち歩くようにすると安心です。

外に出る時に持ち歩くもの

ポーチなどに災害時に必要なものを入れておくことで便利です。ニーズに合わせてチェックしましょう。

必要なもの

- スマホ用充電器
- 現金
- 大判のハンカチ
- 身分証明書・健康保険証など
- 飲料水(ペットボトル500ml程度)
- 携帯食(ゼリーなどの栄養補助食品)



家の非常用持ち出し袋に入れるもの

自分のニーズに合わせてコンパクトに。ベッドの近くなど持ち出しやすい場所に置きましょう。

必要なもの

<input type="checkbox"/> 飲料水	<input type="checkbox"/> 携帯食(ゼリーなどの栄養補助食品)
<input type="checkbox"/> 軍手	<input type="checkbox"/> アルミシート・ボンチョなど(防寒や着替え時に役立つもの)
<input type="checkbox"/> 缶切り	<input type="checkbox"/> スマホ用充電器
<input type="checkbox"/> 乾電池	<input type="checkbox"/> くすり
<input type="checkbox"/> ゴミ袋	<input type="checkbox"/> スマホ用予備バッテリー
<input type="checkbox"/> 筆記用具	<input type="checkbox"/> ティッシュペーパー
<input type="checkbox"/> 耳栓	<input type="checkbox"/> 使い捨てカイロ
<input type="checkbox"/> タオル	<input type="checkbox"/> ライター類
<input type="checkbox"/> スリッパ	<input type="checkbox"/> 衣類
<input type="checkbox"/> 救急用品	<input type="checkbox"/> ヘルメット

コロナ対策のための必需品 マスク 体温計 アルコール消毒液

女性が必要なもの・あると便利なもの

<input type="checkbox"/> 生理用品	<input type="checkbox"/> 前にあったスキンケア用品	<input type="checkbox"/> 下着
<input type="checkbox"/> おりものシート	<input type="checkbox"/> 小型ライト	<input type="checkbox"/> 髪留め
<input type="checkbox"/> 携帯用ピチ	<input type="checkbox"/> 中身が見えないポリ袋(大・小)	<input type="checkbox"/> メイク道具
<input type="checkbox"/> 汗拭きシート	<input type="checkbox"/> 使いやすい形状の携帯トイレ	<input type="checkbox"/> メイク落とし



実際に背負ってみて 大丈夫な置きに

まず命を守るため、逃げるときにこれだけは持っていきたい、という最低限のモノを入れましょう。

避難所で過ごす時の服装

避難所では床の上に寝る場合もあります。できるだけ過ごしやすく、動きやすい服を用意しましょう。



マスクをつける

温度調整がしやすいよう重ね着できるもの

長時間履いても壊れない靴を

スカートよりパンツ

スリッパも あると便利

© FUKKO DESIGN JVOAD 協力:浅野幸子(女性と防災の研究者)、本郷寛子(母と子の育児支援ネットワーク)、あんどうりす(アウトドア防災ガイド)、賀木健太郎(室研究者)、黒島新也(災害担当記者)、後々木晶二(元内閣府防災室副室長)

画像提供:FUKKO DESIGN/全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)

執筆者プロフィール

阪神・淡路大震災に際して学生ボランティアから国際協力NGOのスタッフとなり、在宅避難者・仮設住宅・全焼地域の復興支援などに4年間従事。その後(財)消費生活研究所などで事務局・研究員として勤める。この間働きながら法政大学大学院修士課程修了(政策科学修士)。2011年に発足した東日本大震災女性支援ネットワークの活動に参加。2014年より、後継団体の「減災と男女共同参画 研修推進センター」共同代表。主な分野は地域防災。各地で、防災講演・講座・研修を行いながら、国の「避難所運営ガイドライン」(2016)「男女共同参画の視点からの防災・復興ガイドライン」(2020)などにも関わる。



あさの さちこ
浅野 幸子
減災と男女共同参画 研修推進センター 共同代表
早稲田大学地域社会と危機管理研究所 招聘研究員



ジェンダーの視点で考える、 みんなを守るための防災



誰もが同じ目線で対話できる防災をめざして

港区の人口は、およそ25万8,000人(2021年8月現在)。区民の約9割がマンションに住んでいます(港区住宅基本計画[第4次]より)。港区で暮らし、働くうえで、マンションの防災対策について知ることはとても重要です。港区を拠点に活動する「みなとBOUSAI女子会」の久保井 千勢さんに、マンションにおける防災の取り組みやこれまでの活動についてご紹介いただきました。

みなとBOUSAI女子会って?

みなとBOUSAI女子会(以下、女子会)は、港区の女性防災士ネットワークです。「資格取得後3年以内の女性防災士が自信を持って地域活動に参加するためのステップ」というコンセプトで、年に数回、仲間の活動を聴く意見交換会を開催。仲間の活動を知ること、「私にもできるかも?」と自信を持ち帰ってもらうことが目的です。自信がつけば主体的に地域活動に関わることができ、そして次は女子会でその活動を話す側にまわってもらう。つまり、自信の循環を通して、港区の防災に貢献する取り組みです。

活動のきっかけ

私が防災をはじめたのは5年前、マンションで防災理事になったことがきっかけでした。その後、より主体的に参加したいとの気持ちから防災士の資格を取得。しかしながら、現実には厳しいものでした。多くの仲間が「自分の意見が言えない」「既存の組織に入りにくい」と、防災から離れていったのです。防災の世界には上下関係、性別役割分担意識が根強く残り、既存の組織に参加しにくいのが現状でした。

志のある方々が、防災から離れることは港区の防災にとって大きなマイナス。現状と真逆のことをしたらプラスに転じるのではないかと考え「女性同士で、キャリアで差を作らず、同じ目線で対話ができる場」を作ること。それが女子会のコンセプトに発展しました。

活動のヒントはマンションでの防災活動から

私はマンションの防災委員長も務めています。「顔が見えるご近所関係が防災の第一歩」をモットーに活動を始めて5年。防災訓練をはじめ、七夕、クリスマスなどのシーズンごとのコミュニティイベントも防災委員会が企画し、管理組合と

一緒に運営しています。コミュニティを軸とした防災活動によって、居住者の防災意識、挨拶率が向上しました。

一昨年より、近隣マンションとの情報共有や連携防災訓練なども開催しています。自分のマンションにない知見は、それを持っているマンションから教わるのが近道。女子会では顔が見えること、同じ目線での対話、双方向に感謝できる関係などを大切にしていますが、これらもマンションでの活動を通じて得たものです。

コロナ禍での活動

女子会では、5月にオンライン意見交換会、マンションでは各戸で安否確認カードを扉に貼り出す「お家で安否確認訓練」を開催。生活の変化に合わせて、活動も変化しています。柔軟な活動ができるのは、共に歩む仲間のおかげ。これから仲間と共に臆せず変化していこうと思います。

執筆者プロフィール

「顔が見えるご近所関係が防災の第一歩」をモットーにマンションの防災拠点となる集会所で月一回コミュニティカフェを運営。港区芝地区総合支所と慶應義塾大学が協働で実施する「ご近所イノベータ養成講座」のメンバーで立ち上げた「みなとBOUSAI女子会」の代表としても活躍。



くぼい ちせ
久保井 千勢
みなとBOUSAI女子会 代表



ジェンダーの視点で考える、 みんなを守るための防災



災害時に「下着を自分で洗う」ことの重要性

いざというときのための防災グッズ。食料や水、懐中電灯、携帯トイレなど、災害時を乗り切るために必要なものはたくさんあります。そんな中で見落としがちなのが、下着です。避難所生活が長期化する可能性がある災害時、下着を準備していることや下着を洗濯できることはとても重要です。港区で起業し、防災下着「レスキューランジェリー」を販売する株式会社ファンクション代表の本間麻衣さんに寄稿いただきました。

あらゆる人に対応できる防災下着「レスキューランジェリー」

株式会社ファンクションは、2013年に創業したランジェリーブランドです。現在では、東日本大震災の経験を踏まえて、備えることの重要性を実感し、非常時用防災備蓄下着「レスキューランジェリー」という商品を主力にしています。3.11当時、避難所生活の中では、衣食住に関するさまざまな問題が発生していましたが、その一つに「下着を替えられない、洗濯できない」というものがありました。そんな問題を解決するためのプロダクトとして、女性だけでなく、男性や子ども、高齢者の方ら、すべての人に対応できる防災下着を開発しました。

セットの中身は、下着(ブラトップ・ショーツ・布ナプキン)、洗剤、内側防水加工を施したバッグ。下着は抗菌防臭効果が高い竹布を使用しています。四角い形で一見タオルのような布ナプキンはケガの際の当て布や、生理用ナプキン、ライナー、尿漏れライナーとして利用可能です。見た目がハンカチと同じなので、下着を干す際の盗難防止、犯罪抑制にも繋がります。洗剤は、重曹+特許成分で汚れ落ちがとて良く、BOD・COD(川や海に対する汚染値)が水道水とほぼ同じで安全なうえ、すすぎ1回でOKです。バッグは、防水加工でバケツ代わりや簡易水囊、洗濯バッグとして下着や靴下、Tシャツなどを自分で洗えます。干す時はバッグを逆さまにして、下着が人目に触れないようにできるのもポイントです。

「避難所生活でも下着を自分で洗いたい」というニーズ

開発当初、実際に役立つのが、2015年9月に起こった茨城県常総市の河川氾濫による大規模水害発生時です。常総市は私が生まれ育った町。現地に向かい、堤防決壊数時間前に常総市・水海道地区の避難所や小学校にレスキューランジェリーと水を届けました。このことを自身のSNSでシェアしたところ、「石下地区にもレスキューランジェリーを届けてほしい」という連絡をいただきました。連絡が届いたのは決壊から4日目。石下総合体育館で洗濯ボランティアの窓口をされていた方からの連絡でした。

その方は2つの利点をレスキューランジェリーに見いだして、連絡を

くださいました。1つは、衣服の洗濯に関する需要と供給のバランスが追いつかない状況で、「下着だけでも清潔に保ちたい」というニーズに応える点。2つ目は、ボランティアさんたち、他人に自分や家族の下着を預けるのは抵抗があるという被災した方々の心理的なストレスを緩和するためだとおっしゃっていました。下着は最もプライベートな衣服。家族に乳幼児がいれば糞尿の始末も含まれます。避難所で生活する方にとって下着を自分で洗えるというのは、とても重要なことだと伺いました。

コロナ禍の防災について

2021年現在、コロナ禍以前と以降では生活様式が大きく変容し誰かと何かをシェアすることが難しい状況です。頻発する大雨災害などをきっかけに私の家庭では、「コロナ禍で水害が起きた場合、避難所で洗濯機をシェアすることが物理的にも難しく、精神的にも抵抗があるのではないかな。限られた共有スペースの中で洗濯物を干す場所を確保するのも難しい状況ではないか」などと話し合いました。コロナ禍以降に考えられる、新しい生活スタイルの備蓄について、防災の日をきっかけに見直してみると家族の安心が1つ増えると思います。ぜひ家族や身近な人たちとお話ししてみてください。

執筆者プロフィール

1977年茨城県常総市生まれ。社会で女性が一つの機能(ファンクション)として活躍できる世の中を目指し消費者目線でのモノ、コトの提案、提供をする会社を2013年に起業。災害時の女性の「困った」を助けるプロダクトレスキューランジェリーを開発。

商品企画、開発、セールスを行う一方、有事の際は商品の無償提供で被災地支援を行うプロジェクトを主催。



ほんま まい
本間 麻衣

株式会社ファンクション 代表
公式サイト: fansion-inc.jp

港区の防災の取り組みについて聞いてみました!

東日本大震災の発生から今年で10年が過ぎました。甚大な被害から得た教訓を踏まえて、各自治体の防災政策に男女平等参画の視点を取り入れられ、災害弱者の立場に立った取り組みが行われつつありますが、未だ課題は残ったままです。みんなが尊重される防災のためには、ジェンダーの課題はもちろんのこと、その地域の特性にも目を向けた対策が必要になってきます。私たちが暮らし、学び、働く港区において、どのような取り組みが行われているのか、港区 防災危機管理室 防災課 地域防災支援係長の井上正彦さんにお話を伺いました。

Q1. 港区の地域性に合わせた防災のための支援について教えてください。



A. 港区は、区民の約9割がマンションに住んでいるという特徴があります。マンションに応じた防災対策ができるように、「港区マンション震災対策ハンドブック～在宅避難のすすめ～」を作成し、ホームページ上で公開しています。また、区内のマンションを、6階建て以上かつ20戸以上の高層住宅、3階から5階建てかつ10戸以上の中層住宅、高層住宅および中層住宅を含むすべての共同住宅の3類型に分け、住宅の規模に応じて、防災資器材の現物支給などを行っています。ほかには、港区内に住民登録があって、住まいの家具転倒防止対策を希望する世帯に対して、1世帯1回限りで家具転倒防止器具の現物助成をしています。高齢者・障害者・妊産婦がいる世帯・ひとり親家庭など、自力での取り付けが困難と思われる世帯には、助成を受けた器具の取付け支援なども行っています。

Q2. 港区では、防災・減災分野における女性の参画のためにどのようなことをしていますか。



A. 港区の防災士の約4割が女性であり、それぞれが地域で活躍してもらえるように支援しています。女性の消防団員の割合は23区の全体平均だと、20.4%という数字が出ています。港区の女性の消防団員は、それよりも多い25.6%です。港区には、防災の意識が高く、「私たちの地域は私たちが守る」という強い気持ちをもって活動されている女性が多くいらっしゃるとうかがえます。



高輪消防団女性隊

Q3. 多様なニーズに応じた災害用の備蓄はなされていますか。



A. 女性には、生理用品や下着などを用意しています。赤ちゃんには、哺乳瓶、液状ミルク、おむつ。高齢者には、おかゆ、おむつなど。外国人の方で、食事に関して宗教上の制約がある方に対してはハラルフードなど。アレルギーがある方には、アレルギー食材を使用していないごはんなどを用意しています。このほか、女性専用集合トイレや、プライバシー確保のためのパーテーションも避難所1つにつき1つずつ用意しています。

Q4. 区民避難所において、男女平等参画の視点に基づいた運営ができるよう取り組みが行われていますか。



A. 区民避難所は地域防災協議会(町会・自治会、企業、PTAから構成)により運営されます。ある協議会では、防災マニュアルを作成する際に女性が役員として参加し、積極的に女性の視点を入れるようにしています。また、避難所の運営においては、炊き出しの作業が女性に集中しないよう、男性が入るようにしたり、生理用品は女性役員が配布するようにしたり、女性用の物干し場を設置したりといった配慮をしています。

Q5. 新型コロナウイルス感染症の感染リスクを減らす取り組みを教えてください。



A. 港区は「自助・共助・公助」の考え方のもと、避難所での新型コロナウイルス感染症対策も進めています。手指消毒用のアルコールやマスクの備蓄はもちろん、避難所で「3つの密(密閉・密集・密接)」が発生しないよう、住み慣れた自宅生活を続ける「在宅避難」や、親戚や友人宅への「縁故避難」を検討してもらうなど、避難には選択肢があることを呼びかけています。

Q6. 防災のために、区民ができることは何ですか。



A. 減災の取り組みです。災害が起きたときに備えて、家具の配置を工夫する、外出先で災害に遭ったときの連絡方法を決めておく、ハザードマップで家の周辺の危険な場所を把握するなど、事前によく家族で話し合っておくことです。港区防災アプリやホームページ、広報みなとなどでは、防災・災害対策の情報を発信しています。日頃から情報を家族や友人と共有していただきたいと思います。

Q7. 東日本大震災の発生から11年目を迎えた今、思うことについてお聞かせください。



A. まずは、2011年3月11日午後2時46分に、甚大な被害が東日本を中心に発生したことを忘れないでほしいです。災害は怖いもの、危険なものということを改めてお伝えしたいと思います。人の記憶は薄れていくもの。その記憶を風化させないことが重要と考えています。毎年、広報みなと3月11日号では、東日本大震災の教訓を忘れることなく、区の防災対策の取り組みなどを発信しています。防災の基本は、「自助・共助・公助」です。自助は自分の命と大切な家族の命を守ること、共助は自分の周りにいる人の命を助けること。これを区民のみなさまにはお願いをしたいと思います。これを実行すれば、100%命を守れるといった完璧な防災はありません。日頃忙しく、防災について、意識をしていない人もいると思いますが、コロナ禍で家族との時間がとれるこの時期に、ぜひ「防災・減災」について家族で話し合い、実行してほしいと思っています。



公式ツイッター 港区 防災危機管理室
@minato_bousai



家具転倒防止器具等助成のご案内
<https://www.city.minato.tokyo.jp/bousai/kateibousai/kagu.html>



港区マンション震災対策ハンドブック
<https://www.city.minato.tokyo.jp/chiikibousai/i/29manshonhandbook.html>



リーブラで活動する団体紹介



リーブラで男女が平等に参画できる社会の実現を目指し、具体的な活動を行っている「男女平等推進団体」「男女平等学習団体」のみなさんをご紹介します。



男女平等学習団体 港区更生保護女性会

会長 しお や いく こ 塩谷 征子さん



港区更生保護女性会は1967(昭和42)年8月2日、港区更生保護婦人会として会員数50名で発足しました(平成15年5月14日に現在の団体名に改名)。今年で設立54年になります。

〈更生保護〉とは、犯罪や非行をした人が地域社会で立ち直れるように支援することで、私たち「港区更生保護女性会」は、犯罪や非行のない明るい社会を作ることを目的として、法務省の中の東京保護観察所と連携しながら、自主的に活動しています。

会員は女性保護司と男性保護司の妻たちを中心に、地域で活動している民生児童委員、警察署内の母の会、港区赤十字奉仕団、東京都薬物乱用防止推進協議会、各種の婦人会、町会自治会の女性たちで構成されています。現在は7代目の会長で、会員数は190名です。

活動としては更生施設での給食奉仕、男の料理教室、クリスマス会、サマーコンサートの実施、刑務所、更生施設、少年院、薬物依存の更生施設の研修、広報誌『そよかぜ』年1回発行、社会を明るくする運動(全国的に7月1日～8月末)の啓発などをおこなっています。



みなと区民まつりバザー

その他にも、港区内の学童クラブや児童館、子ども中高生プラザ、地域のお祭りで踊りや折り紙などの催しもおこなっています。また、愛宕分区、三田分区、高輪分区、麻布分区、赤坂分区の5区では、分区ごとの地域行事に

も参加しています。みなと区民まつりには毎年参加し、バザーで更生保護の活動資金を集め、保護司会と一緒にパレードに参加して、啓発・広報活動をしています。リーブラでは、昭和60年代より、毎年、文化祭やフェスティバルに参加させていただき、来場者に飲食の提供と活動紹介の展示をおこなってきました。

再犯防止に向けた生活支援や心のサポートは、多くの方のご理解とご協力が欠かせません。出所後に家庭に戻れない方のための更生施設で、みなさんと一緒に料理を作ったり、食事をしたりする活動の中で頂戴する「久しぶりに家庭の味を味わいました」というお声は大変うれしく、やりがいを感じます。私たちは罪を犯した方々が出所後、社会で孤立せず、再犯しないための応援団なのです。



更生施設での男の料理教室

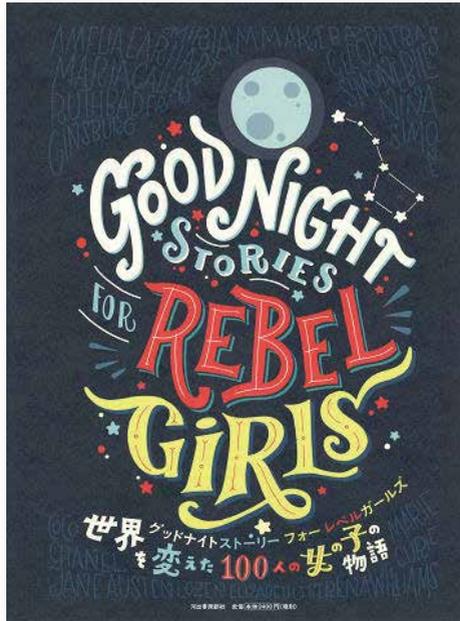
活動資金は、すべて会員1人1,000円の会費とバザーの収益でまかなっているため、コロナ禍でお祭りが中止となり、バザーができず、厳しい状況にあります。経済的な支援もぜひみなさまにお願いしたいことです。

地域の関係団体の方々、東京保護観察所、港区各地区総合支所にご協力いただき、明るい社会づくりをこれからも頑張ります。若い世代の方にもぜひこの活動に関心をもっていただきたいと思います。ご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

お問い合わせ

090-4725-6752 塩谷まで

おすすめ図書



『世界を変えた 100人の女の子の物語』

河出書房新社

著: エレナ・ファヴィッリ フランチェスカ・カヴァッロ

訳: 芹澤恵 高里ひろ

『世界を変えた100人の女の子の物語』は、女の子だからという理由だけで「～をしてはいけない」、「～するべきだ」と言われた時代でも、夢を目指して偉業を成し遂げた女性たちの物語と肖像画が集められた本です。バレリーナ、スパイ、数学者、歌手、画家、世界各国で活躍した女性たちのポジティブストーリーと人生の指針となる心躍る言葉が、どのページにも詰まっています。

現代社会は「ジェンダーレス」を目指して進んできてはいますが、未だに無意識に刷り込まれた「女の子だから～」というしほりから、自らの可能性を狭めてしまうケースも多いと思います。海賊として恐れられ伝説となったジャコット・ドライエ、世界初のコンピュータ・プログラムを書いたエイダ・ラブレースのエピソード、そして発明家アン・マコシンスキーの「生きていれば、だれでも光をつくりだすことができる」というメッセージ等々は、読む人の心を捉えてはなりません。誰でも心が自由であり、夢を追い続けていれば、想いはいつか叶うということを改めて教えてくれます。

そして、この本の最後には、あなたのお話を書くページと肖像画を描くページがあります。101人目の女の子の物語を今度はあなたが書いてみませんか。

戸板女子短期大学 国際コミュニケーション学科 学科長・教授 佐藤美保

港区立男女平等参画センター リーブラ

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦

Tel:03-3456-4149 Fax:03-3456-1254

▶ <https://www.minatolibra.jp/>

アクセス

- JR「田町駅」東口(芝浦口)徒歩5分
- 都営地下鉄浅草線「三田駅」A7出口 三田線「三田駅」A9出口 徒歩7分
- ちいばす ◆芝ルート・芝浦港南ルート「みなとパーク芝浦」徒歩0分
◆芝浦港南ルート「芝浦一丁目」徒歩4分
- 都営バス(田92・99)「田町駅東口」徒歩6分



@libraminato

